

学部・研究科等の研究に関する現況分析結果

1. 学校教育学部・学校教育研究科

研究 1-1

学校教育学部・学校教育研究科

I	研究水準		研究 1-2
II	質の向上度		研究 1-3

I 研究水準（分析項目ごとの水準及び判断理由）

1. 研究活動の状況

平成 16～19 年度に係る現況分析結果は、以下のとおりであった。

[判定]

期待される水準にある

[判断理由]

「研究活動の実施状況」のうち、研究の実施状況については、平成 19 年度における研究成果の発表状況（教員一名当たり）は、著書 0.40 件、論文 1.63 件、学会等の口頭発表等 1.74 件、教科書等教育実践に関する業績 0.41 件、芸術・体育分野の作品・演奏発表や競技・指導・審査 0.49 件、その他が 0.32 件であり、教育実践に関する業績は平成 16 年度の 0.20 件から平成 19 年度には 0.41 へと増加している。研究資金の獲得状況については、平成 19 年度において科学研究費補助金を 60 件（そのうち新規分 42 件）、そのうち新規分の採択率は 35.7%であり、民間からの受託研究（2 件）等、活発な研究活動が展開されている。さらに、学内においても研究の活性化を図るために、競争的教育研究資金の配分を、教育、研究、地域貢献、学内貢献の 4 領域に分けて行っている（平成 19 年度は 1,400 万円）ことなどは、相応な成果である。

以上の点について、学校教育学部・学校教育研究科の目的・特徴を踏まえつつ総合的に勘案した結果、研究活動の状況は、学校教育学部・学校教育研究科が想定している関係者の「期待される水準にある」と判断される。

上記について、平成 20 年度及び平成 21 年度に係る現況を分析した結果、平成 16～19 年度の評価結果（判定）を変えうるような顕著な変化が認められないことから、判定を第 1 期中期目標期間における判定として確定する。

2. 研究成果の状況

平成 16～19 年度に係る現況分析結果は、以下のとおりであった。

[判定]

期待される水準にある

[判断理由]

「研究成果の状況」について、学校教育学部・学校教育研究科において、教育・心理、

特別支援教育をはじめ、人文・社会、自然さらに保健・体育、芸術の各分野で相応の優れた成果を上げている。一方、学術面では、卓越した研究業績はみられなかったものの、当該大学の特徴である教育に関する臨床研究に関して、算数・数学教育を社会文化的な視点から分析した研究、生活科・総合的な学習を教育哲学的な視点から解明した研究、日本の高校生の危険行動の行動間関連とその要因分析の研究、フロイトが20世紀以降の教育に与えた影響の解明がそれぞれ関係学会で学会賞・奨励賞を得ている。また、北海道の中新統築別層から鯨骨群集を発見したことの報告、40年間解けなかった幾何学の未解決問題へ肯定解を与えた研究は、国際学会誌に掲載されて高い評価を受けるなどして、優れた研究成果を上げている。社会、経済、文化面では、ネパール・ムスタンの植物調査研究の意義と成果を、当該研究の歴史的、学術的な背景、秘境といわれるムスタンの地形的、気象的、歴史的な特徴などを多くの写真を用いて紹介した旅行記風にまとめた研究が、社会、文化に貢献し、優れた成果を上げていることなどは、相応な成果である。

以上の点について、学校教育学部・学校教育研究科の目的・特徴を踏まえつつ総合的に勘案した結果、研究成果の状況は、学校教育学部・学校教育研究科が想定している関係者の「期待される水準にある」と判断される。

上記について、平成20年度及び平成21年度に係る現況を分析した結果、平成16～19年度の評価結果（判定）を変えうるような顕著な変化が認められないことから、判定を第1期中期目標期間における判定として確定する。

II 質の向上度

1. 質の向上度

平成16～19年度に係る現況分析結果は、以下のとおりであった。

[判定]

相応に改善、向上している

[判断理由]

「相応に改善、向上している」と判断された事例が1件であった。

上記について、平成20年度及び平成21年度に係る現況を分析した結果、平成16～19年度の評価結果（判定）を変えうるような顕著な変化が認められないことから、判定を第1期中期目標期間終了時における判定として確定する。

